

あり、眺望はすさまじく、壮大としかいいようがない(この眺望に関しては『エスクエア日本版』97年7月号を参照、すばらしい写真が掲載されている)。列車はその後さらに数箇所の駅に停車しながら急降下していく。車窓は前半とは変わって湿原地帯となり、「ロード・オブ・ザ・リング」を思い起こさせる雄大なものであった。銅溪谷の眺望は確かにすばらしかった。私が最も感動したのは湿原地帯の風景であった。その豊かさはメキシコ南部のマヤ遺跡チチェンイツァのピラミッドの上からの光景と並ぶほどで、見ていて自然に涙が出た。私はここを見ただけでもこの鉄道の旅の価値があったと思った。

しかし、その感動の後は大変だった。列車は貨物列車とのすれ違いの都合で大幅に遅れ、19時50分予定が23時にロスチモスに到着した。ホテルでシャワーを浴び、ベットに入った後もずっと体が揺れている感じだった。

チワワ鉄道の1泊2日は大変な行程であったが、天候に恵まれたこともあり自然に圧倒されっぱなしであった。メキシコの空はどこまでも青く、その車窓はありえない光景の連続であった。今回は日程の都合上1泊2日の強行軍であったが、次回はまだ2日ぐらいかけてゆっくりと沿線を訪ねてみたいものである。



チワワ鉄道からみえる雄大な風景

スプナーとスプナーリズム

経営学部

安藤 聡

スプナーリズムとは「語頭音位転換」である。例えば 'car park' と言おうとして 'par cark' と言ってしまったり、'King Richard' を 'Ring Kichard' と言い違えるようなものだ。スプナーリズムという名称はオクスフォード大学ニュー・コレッジの学寮長を勤めた神学者ウィリアム・アーチボルド・スプナー (1844~1930) に由来する。ロンドンに生まれたスプナーはオクスフォードで古代史、アリストテレス哲学、神学を学び、生涯の大半をニュー・コレッジの研究員兼牧師として過ごした。彼はこの種の言い間違いを頻繁に繰り返していたので、それが有名になり話が脚色されていくつもの伝説になっているのである。実際に 'spoonerism' という言葉はオクスフォードでは口語として1885年頃から使われていたという。

スプナーリズムの面白さは、語頭の子音や音節が入り替わることによって、偶然別な意味になってしまうことがあるという点にある。今日まで語り継がれているスプナーの失言に関する伝説の大半はオクスフォードの学生たちが創作したものとされているが、それらは例えば彼が「我らが親愛なる女王」(our dear queen) と言おうとして「我らが奇人なる学寮長」(our queer dean) と言い違えたとか、「半ば形になった望み」(half-formed wish) を「半ば温められた魚」(half-warmed fish) と、あるいは「よく油を差した自転車」(well-oiled bicycle) を「よく煮込んだ氷柱」(well-boiled icicle) と言い違えた、など

といった話である。コレッジの中庭で火遊びをしていた学生を叱咤するのにスプーナーは、「君たちは中庭で嘘つきと戦っていた」(You were fighting a liar in the quadrangle) と言ったとも伝えられている。これはもちろん、「火をつけていた」(lighting a fire) を言い違えたものである。

このような伝説の中で最もよく出来ているのは次に挙げる例であろう。ろくに授業にも出席せず成績不振に陥った学生に退学を勧告するに際してスプーナー先生は「君は私の神秘学の授業に対して黙れと野次を飛ばし、芋虫を一匹丸ごと味わった。君は次の町の下水に流されてオクスフォードを去ることになるろう」(You have hissed my mystery lectures; you have tasted a whole worm. You will leave Oxford on the next town drain) と述べたという。この科白は本来なら次のようになっていたはずのものである。「君は私の歴史学の授業を欠席し、学期を丸ごと無駄に過ごした。君は次の下り列車でオクスフォードを去ることになるろう」(You have missed my history lectures; you have wasted a whole term. You will leave Oxford on the next down train)。

『オクスフォード引用句辞典』の第二版(1953)では、よく引用されるスプーナーの名台詞として 'kinquering congs their titles take' と 'tasted two worms... town drain' を挙げていたが、第三版(1979)では 'weight of rages' (「賃金の権利」を「怒りの重さ」と言い違えた例)のみを挙げ、その他の有名なスプーナリズムの実例については、「この辞典の以前の版に挙げたものを含め、その多くは正典と認められない」と記している。日常的に彼が繰り返していた言い間違いの多くは、'Ring Kichard' の例のように特に意味をなさないものが多かったであろう。もちろん有名な例のいくつかは実際にスプーナーによって語られた「正典」であったのかも知れないが、文字として書かれたテキストでない以上今となっては明らかなのは誰にも判らない。

またこのような語頭音位転換に限らず、例えば J・M・シングの戯曲『西国の伊達男』(*The Playboy of the Western World*) を彼は『西国の農夫』(*The Ploughman of the Western World*) と称したり、スコットランドの地名ジョン・オグロウツ (John o'Groat's) をジョン・オヴ・ゴント (John of Gaunt: エドワード三世の子) と間違える、といった単純なものも多かった。この程度のことは誰でもやりそうだが、スプーナーは特にこれが激しかったと伝えられている。

スプーナーがこのような伝説を生み出すほどに頻繁に言い違えていた理由は、頭の回転が速すぎて発話がそれについて行けなかったため、と推測されている(確かに、私の恩師にも何人か、そういう傾向が認められる人がいる)。スプーナーの外見は極端に背が低く目つきが鋭く(極度の近視だったため)、体格の割に頭が異常に大きく、メラニン色素の欠如のゆえか妙に色白で、浮世離れたグロテスクな様相だったという。内面は神経質で小心者だが人柄はよく、牧師としてはそれなりに人望もあつたらしい。浮世離れた奇人、というのはオクスフォードの学者の多くに共有される特質ではあるが(というよりも世界中の大学教師の多くに、と言うべきかも知れないが、特にオクスフォード大学では伝統的にその奇人度が尋常でない)、その中であつてもなおスプーナーは伝説として語り継がれるほどの愛すべき奇人であつた。

この奇人の特徴のひとつとして「上の空であること」(absent-mindedness) が挙げられる。おそらくは哲学や神学といった高邁で深遠な事柄について絶えず考えていたためであろうが、スプーナーの思考はつねに日常的な次元を遙かに遊離していた。以下のエピソードはある英語の教科書に載っていたものである。第一次世界大戦が終わった頃のある日、戦地から帰ってきたひとりの学生を廊下で呼び止めて、スプーナー先生曰く、「あー、その、何だ、あれは君だったかな、それとも君のお兄さんだったかな、戦争で亡くなったのは」(Now let me see, was it you or your brother

who was killed in the war?). また急進派ジャーナリストでレフト・ブック・クラブという出版社を設立したことで知られるヴィクター・ゴランツがスプナーにニュー・コレッジでの晚餐に招かれたときのこと、ゴランツがスプナーの客間で待っていると、スプナーは鏡に向かって一所懸命にネクタイを結んでいた。隣の部屋に続く扉が少し開いていて、そこから誰かが文章を朗読する声が聞こえていたと、ゴランツは述懐している。ネクタイ結びがうまく行くとスプナーは満足して、ゴランツを促して部屋を出ようとしたところで矢庭に踵を返し、「忘れていた」などと呟いて半開きだった扉に首を突っ込み、中でまだひとり朗読を続けていた従順な学生に向かって、「だめだ、まったくなっとらん。来週までに聖パウロのエペソ人への使徒書簡についてのレポートを書いてくるように」と言い残し、再びホールに向かったという。つまり、ゴランツが到着したときにスプナー先生は、オクスフォード名物「テュートリアル」(tutorial: 個人指導。週に一度、学生がレポートを書いて来てそれを読み上げ、担当教員がコメントを与えるという形式で進められる)の授業中だったのである。しかし、ネクタイを格好良く結ぶこととゴランツをもてなすことに気を取られていたためか、彼は授業中であることを完全に忘却し、部屋を出る刹那にそれをやっと思出したということなのである。スプナー先生はほとんど聞いてもないそのレポートに不合格を宣告し、次の週までに同じようなレポートを書き直して来い、と命じたのであった。他にもこの教科書には、スプナーが遠い町へ出かけるときに、オクスフォード駅まで見送りに来ていた自分の妻にチップを渡し、ポーターに別れのキスをして列車に乗り込んだ、というエピソードが紹介されている。

スプナーのような奇人を愛して伝説化すること自体が非常に英国的であり、彼は英国でなければ、さらに言えばその英国の中でも奇人の楽園として名高いオクスフォードでなければ、これほどまでに伝説化されていなかったであろう。という

よりも、そもそも英国でなければ、またオクスフォードでなければ、このような人物は育たなかった、と言った方がいいかも知れない。一方で英語は他のヨーロッパ語と比べて遙かに語彙が豊富であることから、語頭音位転換によって偶然別な意味になる可能性もそれだけ高い。スプナーの言い間違いは英語だったからこそこれだけ創造的になり得たのである。英語の言葉遊びに関する本を多く著している米国の著述家リチャード・リーダラーは「スプナーは私たちに、心温まる間違いと英語の恐ろしさの両方を同時に見せてくれた」(Spooner gave us tingly errors and English terrors at the same time.) と述べている。

THREE DAYS IN MADRID

法学部

John Hamilton

I had not been to Madrid before. The summer didn't seem to be a good time to go. The Encyclopedia described it as 'oppressively hot in July and August....Everybody goes away and all the shops are shut'.... but I went because my son Robin was there, and he had been lent a flat by friends who had gone to France.....I wanted to have a glimpse of his life there. It was an opportunity. As it turned out they were among the best days of my summer holiday.

Robin is studying Spanish at Newcastle University and he was coming to the end of his third year out which he had spent in Spain. The